橋本圭介さんからの視察だより ヨーロッパ９日間の旅

（一社）広島県酪農協会は、（一社）全国酪農協会が行う「ヨーロッパ酪農視察」等、後継者育成支援事業として助成金を交付して、今後「広島の酪農」を担う酪農従事者を応援しています。
去る９月４日から 12 日の９日間、スウェーデン、デンマーク、ドイツ、スイス、フランス各国を巡る欧州視察に、橋本洋資組合員（三次市作木町）のご子息・圭介さんが参加され、研修報告が届きましたので皆さんにご紹介します。

Lilla Kyrkhults Farm（スウェーデン）

橋本圭介さん

「Lilla Kyrkhults Farm」の牧場経営者は、二〇〇七年両親から牛や酪農施設を買取り、経営を引き継ぎ、現在の経営者で七代目になる。牧場は二〇〇九年に新築フリーストール牛舎の建設と同時に搾乳ロボット二台を導入（一台当たり八万四千クローネ〈日本円で約百二十七万四千円〉）、搾乳牛八十五頭から百四十頭まで増やし、総頭数三百頭を飼育している。

放牧地十四ha、牧草地百五十haを所有し、主にトウモロコシ、牧草、麦を自給し、四月から十月までの期間の内四ヵ月間は一日六時間の放牧が法律で義務付けられていた。よって放牧期間にあたる夏場の一頭当たりの平均搾乳回数は、冬季の三回を下回り二・六回。放牧期間中はこれによって高泌乳牛の搾乳回数を妨げていると思われたが、こういった新築牛舎をバックに広大な放牧地でのんびり過ごす牛を見ていると、のどかでとても良い印象を受けた。

しかし、乳価は今年五月二・九クローネ／kgから三・三クローネ（〇・四€／kg）【日本円換算で約五十円／kg】へと引き上げられたにもかかわらず北海道乳価よりも低く、政府からの所得補償もない現状であった。一頭当たりの年間乳量は一万四百kgで日量三千七百五十kg。飼料代は生乳生産一kg当たり一・七クローネ（日本円に換算で約二十六円）で、乳価が日本より低いため乳飼比は五十二％程度であった。（注：一クローネは日本円で十五・一七円）

二十年前まであった「ヘルパー制度」は費用が掛かるという理由で廃止され、自由な時間があまり取れないのが実情で、自助努力で経費を抑え、従業員を雇用したいとのことであった。

二 デンマーク農協中央会

首都コペンハーゲンでデンマークにおける農業事情の講演を聞いた。乳業メーカーは二十九社のうち農協系乳業が十社と九十六・五％（その内ヨーロッパ最大規模の乳業メーカーの「Ａｒｌａ社」が九十％）を占め、民間メーカーの割合は三・五％。デンマークは、国民一人当たり年間約十八kgのチーズを消費（日本国民は年間約二kgを消費）しているが、生産した生乳を自国内では全て賄えず、生産したチーズの七割は輸出に依存している。乳製品の輸出量は豚肉に次いで二番目に多く、アジアの中で日本は重要な輸出相手国であるが、四年前を境に中国への輸出量が急増し、現在は中国への輸出量は日本への輸出量の約三倍となっている。

二〇〇四年、ＥＵが補助金を削減し乳価が下落、毎年十％の割合で離農が進み、二〇〇三年の七千二百戸から二〇一三年では三千八十六戸と十年間で約半数まで激減している。近年の減少率は低下してはいるものの、銀行の理解によって経営を維持出来ている農家が全体の十五％、四十％は非常に厳しい経営状況にあると聞いた。

二〇〇五年には、ＥＵのクオータ制度が廃止となることから、酪農および乳業への影響を緩和させるため、ソフトランディングの方法として一％ずつの生産増を計画している。

酪農家戸数が減少している一方で、規模拡大を図り生産性を向上させることで生乳生産量は減少していない。「Ａｒｌａ社」は今後、アフリカ市場をターゲットに考えているとのことであった。

三 Vejlskovgard 農場（デンマーク）

近代的な農場と酪農施設を視察した。まず驚かされたのは、外観ではどの建物が牛舎か分からない程の斬新な建築物であった。

二〇〇一年に、自己資金の二千五百万クローネ（一クローネは日本円換算で十七・八四円・自己資金は約四億四千六百万円）と銀行から二千万クローネの投資（日本円で三億五千六百八十万円）を受けて、酪農に関係の無い建築士に依頼して新設。作業効率が良く、将来的に都会化しても調和のとれる造りにしたという。

牛舎は通路が十文字に通っており、通路の周りには分娩から乾乳までのステージ毎に細かく群分けされて、ステージが変われば隣に移動しさえすれば良い、非常に効率的な構造であった。

この新設された成牛牛舎は現在、成牛四百頭で、三百四十頭を六台の搾乳ロボットで搾乳していた。年間一頭当たりの乳量は一万千三百kg（三十四kg／日）で年内中には一万二千kgの見込みで、搾乳ロボットを二台増設し、成牛六百頭に増頭予定と聞いた。また、飼料給与、エサ寄せ、搾乳、除糞、フリーストールの敷料補充など、殆どの作業は機械で自動化され、作業の時間短縮と軽減が図られ、総頭数七百頭の飼養管理を僅か三名で行い、人件費削減に努めていた。一日の作業終了時間も十八時と近未来型を目指す農場ということで、今後は養豚など酪農以外の分野も計画されている。

四 Milchhof Reitbrook Farm（ドイツ）

隣の農家二件の共同経営で牛舎はそれぞれにあった。この牧場の特徴は、牛乳とヨーグルトの製造販売であった。

牛乳は低温殺菌牛乳と無殺菌牛乳の二種類で、出荷条件を満たしていれば販売出来るようで、ドイツ国内で四十戸の農家が認可されている。「人間も牛も母乳は殺菌せずに飲むのだから」という理屈らしいが、そのシェアは『低温殺菌▽無殺菌』。ヨーグルトはプレーンの他にフルーツを使用したもの

等十九種類と豊富であった。

販路は約千件の家庭の他に学校やレストラン等があり、自分達で配達していることには感心させられた。

私の祖父も七十歳過ぎまで牛乳配達をしていたことから、昔ながらのやり方とも感じたが、牛乳を確実に消費者に届け、飲んで貰うという意味では牛乳配達は大変有効な手段であるとも思え、消費者を身近に感じながら酪農をする大切さを改めて教えられた気がした。

五 Alfred Kolb Farm（スイス）

グリンデルワルドから少し下ったルッチェンタール地方で山岳酪農を営むコルブ牧場を視察した。

シンメンタールとレッドホルスタインを掛け合わせたスイスフレックフィーという品種の牛を二十頭飼育していた。一頭当たりの乳量は六千～七千kg。六～九月までの約百日間は標高千六百m～二千mの共同放牧地に牛を放し、山で搾乳をする。チーズ製造は一シーズン一頭当たり八十～百kgを製造。冬は牛を下して舎内で繋飼い。

山岳放牧の過酷さは、綺麗で穏やかなスイスの放牧風景からは想像できなかった。国からの補助金はあるものの、ご主人は冬場にはスキー場でアルバイト、奥さんは年中、酪農と養老院を掛け持ちして生計を立て、四人の子供達もレストラン経営などで、それぞれが独立しているという話であったが、「山岳放牧」という厳しい労働環境に見合うだけの収益性がなければ後継者を確保することは難しいようにも思えた。

六 最後に

この九日間に亘るヨーロッパ五か国の視察研修は、大変有意義な研修でした。国や地域によって、酪農事情や条件は異なりますが、それぞれのやり方で試行錯誤し経営されていました。

日本ではTPP交渉の動向が気になるところでありますが、この関税撤廃によって日本の酪農業界に及ぼす影響は多大なものがあると予想しています。

我々は酪農業を生業として、生計を立てていかなければいけません。今回の視察において、生産努力や販売戦略、酪農による地域貢献性など大変刺激になったことが多く、改めて「自分なりの酪農とは何か」を考えさせられました。

今回の視察研修にあたり、家族をはじめ、視察にあたり協力して下さった皆さんへの感謝を忘れず、今回の研修で得たものを今後の酪農経営の糧にして頑張っていきたいと思います。

ありがとうございました。